



第7回国際旅行医学会 インスブルック・レポート 2つの開会講演と……

篠塚 規(オブベースメディカ・医師)

プロローグ

ローマ駅、朝8時発の国際特急列車 I.C.E.(inter-city express)に乗ると、夕方の4時にオーストリア西部のスキーリゾート、川と緑の都市、インスブルックに到着します。

午後の遅い昼食を食堂車でハーフボトルのイタリア赤ワインとともに楽しんでいると、車窓には新緑のプレナー峠と小さな村々の尖塔状の教会が明るい風景画のように過ぎさってゆき、至福の時間がゆったり流れてゆくのが感じます。

イン川の水は石灰成分で白濁していますが、川沿いの緑は豊で、その北側には3,000メートル級の雄大な山塊がせまっています。インスブルックとは、イン川にかかるブルック(橋)の街というのが語源です。

学会の合間をみつけ、ケーブル、ロープウェイを3本乗り継いで、この山

並みの頂上への遊歩道を行くと、80歳の老人グループがゆっくりとマイペースで登ってゆくのに出会いました。

スイス出身のアメリカ人医師の奥さんによれば、この坂道をゆっくり歩く日ごろの習慣のため、高齢になっても足腰の筋力が衰えず、転倒による骨折が少なく、スイスやオーストリアでは寝たきりの高齢者がきわめて少ないとのことでした。頂上点下では、スキー滑走の注意を促す看板は独、仏、伊、英語に加え日本語の表示まであり、インド映画のロケ隊がにぎやかなインド楽器でインドの踊りを舞い、今日の人々の移動、つまりtravelが多種多様になっていることが改めて実感されました。

第7回国際旅行医学会は、5月27日～31日の間この新緑の街インスブルックで開催されました。



21世紀の 知っておきたい旅行医学 (航空機時代へ向けての対応)

開会講演

旅行医学もう1つの視点
(自然と人へのインパクト)

スイス人ドクターのオールツ氏により、先進国旅行者を受け入れる国の視点からヒマラヤの登山史と今日のヒマラヤ登山とトレッキングの現状がスライドを多数使用し発表されました。

高度8,000メートルの、死体を含めての世界最高地のごみ捨て場と化したエベレストを見ると、登山を含めツーリズム(旅行)の自然へのネガティブインパクトのすさまじさがいやでも実感され、自然を汚さないエコツーリズムの大切さが分かります。そしてこのネガティブインパクトは、地元の人々の精神や地域文化にも及んでいます。政治、宗教、そして民族の壁を越えて特に発展途上国への社会的なネガティブインパクトに対して配慮することも21世紀の旅行医学の主題の1つです。

少し極端な見方をすれば、「旅行医学」は、アメリカ人がメキシコやカリブ海の国々に安全にバカンスに行くため、そしてスイスなどヨーロッパの人々がアフリカへのビジネスや旅行をいかに安全に行くかという金持ちの国の「エゴの実用医学」として12年前にスタートしています。

“旅行者の移動の視点”から世界の国々

を2つに分けると、

旅行者を送り出す国、アメリカ、ヨーロッパ諸国、そして日本などと、

旅行者を受け入れる国、カリブ諸国、ネパール、インドネシア、アフリカの国々に分けられます。この国々を“ホストカントリー”とよび、この数年ホストカントリーの視点からの旅行医学のアプローチがオーストラリア、カナダ、インドなどの医師から提言されています。

日本にフォーカスをおいてみると、日本の資本がバリ島にゴルフ場を作り、数年経って周囲が開発されたため、さらに自然を破壊して、別の場所に新しく移動することがバリ島の自然と人々に何をもたらしているのでしょうか？.....

大勢の日本人トレッカーがネパールの人と自然に何をもたらしているのでしょうか？.....

日本の豪華クルーズ客船が何トンもの汚物や排水を南極やアラスカの海に垂れ流している現状は？.....

“エゴの旅行医学”から“ユニヴァーサル旅行医学”への転換期に、私たち日本人も一度立ち止まって考える必要が多いにありそうです。

開会講演

希望への処方せん
(難民の旅行医学)

オーストリアは、名画「サウンドオブミュージック」の舞台です。ニューヨークのK.ノイマン医師は、約60年前9歳の時、ナチスの手を逃れ途中多くの国でかくまわれ、スウェーデンからシベリア鉄道でウラジオストックへ、ウラジオストックから日本、日本からシアトル、そして米国を汽車で横断し、ついにニューヨークに到着しています。その9歳の彼の心の中を回想しています。

「ナチスに追われ不安と絶望の旅のようにみえるけど、不思議と9歳の少年の心の中には確かな希望があった。そしてそれはかくまわれた先の多くの人の心の暖かさから生まれた希望ではなかったかと思います。私は、2度吐いただけでその旅を終えました。1回は





ウラジオストックから日本への船の中、もう1度は米国横断の列車の中でした。それほど鮮やかにその旅のすべてを憶えています。そして今日、このような場所に医師として立ち、このような話しをするとは夢にも思ってみませんでした。

ナチスから逃れ、アメリカへの旅を支えてくれた人々の名前を私は知りません。多分、もう生きてはいらっしゃらないでしょう。でも、私はこの旅で受けた恩は一時も忘れたことはありません。

そして私はこの地とは地球の反対側のニューヨークで、9歳の旅を助けてくれた人々への感謝の気持ちで医師として生きてきました。私を助けてくれた人々には何の恩返しもできませんでしたが、一人一人の患者にその恩返しの心をもって接してきたつもりです。これからも、一人でも多くの患者に「希望への処方せん」が渡せたら、医師として、人間として私は本当に幸せです。

9歳の旅を助けてくれた全ての人々の暖かい行為に心から感謝の意を、ここインスブルックの演台から表します。」

ノイマン医師の淡々とした口演が終わって暫く会場は静かな感動に包まれ、時間が停止したような雰囲気でした。

21世紀の今日でも、数多くの政治難

民、経済難民が途上国にも先進国にも現れ、失意の内にも移動・定住しています。「難民の旅行医学」は感染症や難民の健康という側面に加え、人道的側面での視点が必要です。

一例ですが、イタリアは難民を含むすべての旅行者の救急医療を無料化しています。むろん国家経済が豊かで有り余っているわけではありません。一部には宗教的なバックランドもありますが、その昔アメリカでの弱者としてイタリア移民の苦勞を自国に来る人々に味わせてはならないという固い政界人の思惑によるもので、厳しい経済事情の今日でも、無料医療は続けられています。では今日の日本では、地方の医師でも日常治療する日系ブラジル人、中国、イラン、フィリピンなどの在日外国人への医療は国として、あるいは自治体としてどのような考えに基づいて行われ、現状はどのようなになっているのでしょうか？

相当数の日本人が海外で優れた医療を受けている一方で、日本を訪れる外国人が自費診療ということで健康保険単位の2倍、3倍請求されているとしたら、「公平の原理」も「善きサマリア人の法」も今日の日本にはないのでしょ

うか？
21世紀の日本の旅行医学は、日常外国人治療にもスポットをあてなければならぬと思われま

す。そしてその原則は、私たちは一人の医師として

“希望への処方せん”を書いているのだろうか？”という問いにあるのかもしれませんが。

エピローグ

学会最終日に、いつものようにインスブルック大学病院救急部と透析室、そして市内の透析病院の見学を行い、翌朝列車でチューリッヒに向かいました。

5月の午後のインスブルックの新緑の雨は、30年前の谷川岳のやわらかい雨に黄緑の絵の具が水彩画のように流れたような風景を思い出しました。偶然にも駅で出会い、車中、コンパートメントで5時間の会話を楽しんだのはI.A.M.A.T. (International Association for Medical Assistance to Travellers)の創始者の夫人で現会長でした。このI.A.M.A.T.の歴史からスイスの伝統建築、そして雪崩の解説などで5時間があっという間に過ぎ去りました。

真のTravel Medicineのエキスパートとは、彼女のように広い知識とホスピタリティーをもつ人柄の専門家なのでしょう。この7月に「日本旅行医学会」が発足しました。多くの先生方が日本の21世紀の旅行医学に関与して下さることを望みます。



観光客がやってきた トリニダード島の今

Cecil Rajendra
嶋崎由美・篠塚 規 訳

1

観光客がやってきた
大蔵大臣は所見を述べた
「景気が良くなるだろう
ドルがたくさん流れ込んで来るだろうから」

2

国務大臣は所見を述べた
「いろいろな仕事
がたくさん出て
あなたたちすべてが職に就けるだろう」

3

文部大臣も所見を述べた
「生活が豊かになるだろう...
他国の分化に触れれば
必ずや
生活そのものが良くなるに違いない」

4

ヒルトンの支配人は私たちに言った
「この島を第二の paradisa にしてやろう
輝かしき未来への幕開けだ!」

5

観光客がやってきた
私たちは
一変して
グロテスクな見世物となり
彼らの2週間のヴァケーションのサイドショー

6

観光客がやってきた
青年たちは魚網を捨て去り
ボーイとなり
少女たちはホステスとなった

7

観光客がやってきた
島の文化は
窓から流れ出て行った
私たちは伝統文化と引き換えに
サングラスとポップミュージックを手に入れた
神聖な儀式は
安っぽいピープショーになった

8

観光客がやってきた
島で採れる食料は不足し
物価は上昇したのに
私たちの稼ぎは少ないままにとどまった

9

観光客がやってきた
私たちはもう
浜へ出られなくなった。
ホテルの支配人は言った
「おまえたち地元民は海岸を汚す」と

10

観光客がやってきた
飢えと汚い生活はそのまま
通りすがりの見世物だ
通りすがりのカメラの被写体は
金持ちの目障り物

11

観光客がやってきた
私たちが強いられることは
“ 歩道 ” の親善大使になるように
微笑みと礼儀を忘れないように
“ 心ない ” お客さんたちを
どんな場合も丁寧に案内しなさい...
ああ、言ってやりたい!!
“ 心ない ” お客さんを本当に案内したい所とは
本国にお帰り願いたい
昔の島に戻れたら...

When The Tourists Flew In

By Cecil Rajendra-writing about Trinidad

1

When the tourists flew in,
The Finance Minister said
"It will boost the economy
The dollars will flow in"

2

The Minister for the Interior said
"It will provide full
and varied employment
for all the indigenes"

3

The Minister of culture said
"It will enrich our life...
contact with other cultures
must surely
improve the texture of living"

4

The man from the Hilton said
"We will make you a second
Paradise for you
It is the dawn
of a glorious new beginning!"

5

When the tourists flew in
our island people
metamorphosed into
a grotesque carnival
a two week side show

6

When the tourists flew in
our men put aside
their fishing nets
to become waiters
our women became whores

7

When the tourists flew in,
what culture we had
flew out the window.
We traded our customs
for sunglasses and pop.
We turned sacred ceremonies
into ten-cent peep shows

8

When the tourists flew in,
local food became scarce
prices went up,
but our wages stayed low.

9

When the tourists flew in,
we could no longer
go down to the beaches,
the hotel manager said
"Natives defile the sea shore"

10

When the tourists flew in,
the hunger and squalor
were preserved
as a passing pageant
for clicking cameras
a chic eye sore.

11

When the tourists flew in
we were asked
to be "side-walk" ambassadors,
to stay smiling and polite
to always guide
the "lost" visitor...
Hell, if we could only tell them
where we really wanted them to go.

附記と訂正

メビオ6月号「高山病予防として：アセタゾルミド250mg 2回 125mg 2回」

「日本旅行医学会」設立のお知らせ

日本人旅行者に関する医学統計調査と分析を行い、国際スタンダードに沿った旅行医学を研究する学会が2001年7月1日に設立されました。9月1日より会員募集を始めます。
連絡先 TEL03-5411-2144 FAX03-3403-5861 日本旅行医学会準備室